

通年型冒険キャンププログラムが不登校児の心理・社会的変化に及ぼす影響

平成 16 年度

体育科学研究科 体育科学専攻 199905507 堀出 知里

1. 問題と目的

不登校の問題は解決を見ていない。近年では不登校児に対してさまざまな支援プログラムが実施されている。従来、キャンプを中心とした自然体験活動は不登校児の社会性や自主性の改善に一定の効果があるものと見なされ、盛んに実施されてきた。しかし、冒険プログラム、長期キャンプなどを含む新しい形態のプログラムについては実践事例が少なく、プログラム開発に資する資料の積み上げが求められている。こうした問題を踏まえて、本論文では研究目的を次のように設定した。

本論文は、冒険プログラムを中心とした長期キャンプを含む通年型シリーズキャンプを研究の場とし、キャンプ内外での不登校児の心理・社会的変化に注目した総合的な検討を通して、不登校児を対象としたキャンプの実践上の要件(仮説)を提示することを目的とする。

2. 研究課題と方法論

上記の目的に沿って、冒険プログラムを中心とした長期キャンプを含む通年型シリーズキャンプの実践研究を行った。具体的には、次に示す6つの研究課題を複数の観点から検討し、16名の研究対象児の心理・社会的変化について論じた。なお、本論文の方法論上の特徴は、フィールド研究、ミックスドメソッド、マルチメソッド、事例研究である。研究方法は、研究課題毎に後述する。

- 研究課題 1 不登校児キャンパーの特性
- 研究課題 2 不登校児キャンパーの行動
- 研究課題 3 不登校児キャンパーの仲間関係
- 研究課題 4 不登校児キャンパーの自己観の変化
- 研究課題 5 不登校児キャンパーの社会参加の様子
- 研究課題 6 不登校児が続けてキャンプに参加することの意味

3. 論究の過程

【不登校児キャンパーの特性(研究課題1)】

1) 研究方法

観点 1.1. キャンプ参加に至るまでの経緯

1年目および2年目のキャンプに参加した不登校児16名について、キャンプへの参加希望を受理した時点での、保護者への面接の内容と、保護者記入の個人調査票の内容と、キャンパー本人から聞いた話の内容を整理し、キャンプ参加に至るまでの経緯を把握した。

観点 1.2. パーソナリティー構造

1年目および2年目のキャンプに参加した不登校児16名のうち、データを得ることができた12名について、キャンプ参加前のエゴグラムから、性格特性を表すパーソナリティー構造を把握した。

観点 1.3. キャンプに対する期待と不安

1年目および2年目のキャンプに参加した不登校児16名について、キャンプへの参加希望を受理した時点で、キャンパー本人に対するアンケートを実施した。その回答を整理し、不登校児がキャンプに対して抱く期待と不安の特徴として示した。

2) 結果と考察

不登校児キャンパーは、対人関係を不得手とするパーソナリティー構造の特徴を持ち、キャンプでの対人関係と冒険プログラムに期待と不安を抱きがちであった。こうした特性を持つ不登校児キャンパーに対して、本論文の対象としたキャンプでは、説明会やデイ・キャンプの中でキャンプカウンセラーが直接かかわりを持ち、キャ

ンパーとの関係作りにつとめた。このことが、キャンプカウンセラーおよび他のキャンパーとの間の対人的安心感を不登校児キャンパーにあたえ、キャンプ参加の意志決定や動機を支えたものと推察した。

【不登校児キャンパーの行動（研究課題2）】

1) 研究方法

観点 2.1 対人行動と自主的行動の変化

キャンプ行動チェックリスト（宮西，1989）を基礎として作成した、短縮版キャンプ行動チェックリスト（15項目）を用いた。デイ・キャンプ（1-1）、デイ・キャンプ（1-2）、夏季キャンプ（1）終了時に、研究対象児を担当したカウンセラー4名に、チェックリストへの記入を依頼した。データは(1)測定時期別、(2)研究対象児別、にグラフ化し、そこから見出される不登校児キャンパーの対人行動と自主的行動の特徴とその変化を把握した。

観点 2.2 キャンプでの行動の特徴

1年目（2001年度）の夏季キャンプで、研究対象児を担当したカウンセラー4名の日誌に記録された内容をデータとして使用し、グラウンデッド・セオリー・アプローチを援用して、カテゴリーの生成と関連づけを試みた。

2) 結果と考察

行動面から捉えると、デイ・キャンプを経て夏季キャンプを終えるまでに、不登校児キャンパーの多くがキャンプ環境に適応したといえる。このことによって、キャンプ環境に慣れるための時間が十分に確保できるシリーズキャンプおよび長期キャンプというプログラム構成の有効性を示した。

【不登校児キャンパーの仲間関係（研究課題3）】

1) 研究方法

観点 3.1. キャンプ集団のソシオメトリーの分析

2001年度夏季キャンプ（1）に参加した研究対象児8名と、登校児13名の、計21名の小中学生を研究対象とした。仲間関係を把握するために、キャンプ1日目、2日目、3日目、4日目、7日目、8日目、9日目、11日目、13日目の9回、ソシオメトリックテストを実施した。また、ソシオメトリーの背景を考察するために、カウンセラーがミーティングで報告した内容の記録を利用した。

観点 3.2. 仲間関係の形成と対人的構えの変化

2週間のキャンプに参加した不登校中学生のうち、キャンプ9日目より3人相互の選択関係による友だち関係ができた男子3名を研究の対象とした。

2) 結果と考察

ソシオメトリーから判断すれば、キャンプの場では、不登校児の周囲にも仲間関係が成立した。これについて、同年代および年少の登校児を加えたキャンプ集団の構成が、仲間関係の成立を支えたものと推察した。

【不登校児キャンパーの自己観の変化（研究課題4）】

1) 研究方法

観点 4.1. 自己決定志向性の変化

新井・佐藤（2000）が作成した児童・生徒の自己決定意識尺度のうち、自己決定志向性に関する項目（8項目）を用いて、不登校児キャンパーの自己決定志向性を測定した。分析には、夏季キャンプ、冬季キャンプのそれぞれについて、キャンプ前とキャンプ最終日前夜のデータを用いた。

観点 4.2. 自己充實的達成動機の変化

森・堀野（1997）が作成した子どもの達成動機尺度のうち、自己充實的達成動機（他者・社会の評価にはとらわれず、自分なりの達成基準への到達を目指す達成動機）に関する項目（10項目）を用いて、不登校児キャンパーの自己充實的達成動機を測定した。分析には、夏季キャンプ、冬季キャンプのそれぞれについて、キャンプ前とキャンプ最終日前夜のデータを用いた。

観点 4.3. 自己受容感の変化

西田（2000）が作成した心理的 well-being 尺度のうち自己受容（自己に対する肯定的な感覚）に関する項目を参考にして筆者が作成した3項目の質問を用いて、不登校児キャンパーの自己受容感を測定した。分析には、夏季キャンプ、冬季キャンプのそれぞれについて、キャンプ前とキャンプ最終日前夜のデータを用いた。

観点 4.4. パーソナリティ構造の変化

赤坂・根津（1989）が作成した小児ANエゴグラムを用いて、不登校児キャンパーのエゴグラムを作成した。

分析には、夏季キャンプ、冬季キャンプのそれぞれについて、キャンプ前とキャンプ最終日前夜のデータを用いた。

2) 結果と考察

自己観に関する変数は、冬季キャンプで変化した。一方、パーソナリティ構造についてはパターン変化は少ないが Adult 低位の者に変化が見られた。キャンプで性格は変わらないが、シリーズキャンプによるキャンプ経験の反復を通して自己理解が深まり、自己観が変化したものと考えられる。

【不登校児キャンパーの社会参加の様子 (研究課題 5)】

1) 研究方法

観点 5.1. キャンプへの参加状況

1 年目 (2001 年度) キャンパー 10 名、2 年目 (2002 年度) キャンパー 6 名、計 16 名の研究対象児について、キャンプ参加状況が記載されたキャンプ運営上の記録から、各対象児のキャンプへの継続参加状況を調べた。

観点 5.2. 社会参加状況

1 年目 (2001 年度) キャンパー 10 名、2 年目 (2002 年度) キャンパー 6 名、計 16 名の研究対象児について、保護者への面接を通して社会参加状況を把握した。

2) 結果と考察

キャンプに参加した不登校児には、それに併行して社会参加への動きが起こり得る。また、そうした動きの背景としては、卒業や進学のような節目も無関係ではないようだ。これらを考え併せると、不登校児を対象とした通年型のプログラムを構成していく上で、節目の時機が持つ意味を考慮していく必要があると考えられる。

【不登校児が続けてキャンプに参加することの意味 (研究課題 6)】

1) 研究方法

観点 6.1. 事例の提示 (1 事例)

研究対象児 16 名の中からキャンパー 1 名 (裕子・中 2 女子) を事例として選び、研究課題 1 から研究課題 5 の論究の観点に沿って詳細に記述した。

観点 6.2. キャンプでの出来事との関連についての検討

キャンパー 1 名 (裕子・中 2 女子) の事例について、通年型シリーズキャンプに伴って生じた心理・社会的変化とキャンプの出来事との関連を検討した。

2) 結果と考察

各研究課題を総括するものとして、不登校児キャンパーの事例 (1 事例) から、(1) 仲間関係の形成、(2) 冒険プログラムの達成、(3) 自己表現を受容される経験を背景として、キャンプ経験を通して成長の実感を得るという体験過程を明らかにした。この事例では、キャンプという新たな生活の場での対人交流を継続的に体験したことが自我の成長に寄与したものと考えられ、不登校児が続けてキャンプに参加することの意味を示した。

4. 結論

本論文が研究の場としたキャンプは、不登校児の抱える心理・社会的課題に対して相応の効果が認められた。論究の過程を総括し、(1) 個人の要件、(2) 設定の要件、(3) 関係の要件、の 3 要件を得た。

個人要件

- (1) 本人が自分の意志で参加を決定している。
- (2) キャンプの場で仲間と一緒に過ごせる。
- (3) キャンプに何かしらの期待を抱いている。

設定の要件

設定の要件は、その設定に適したキャンパーを選別する。

- (1) 自宅から離れた遠隔地・都市から離れた自然環境。
- (2) 冒険プログラムを含む長期キャンプ。
- (3) 年間を通してのシリーズキャンプ。

関係の要件

- (1) 関係の力で課題を達成可能にする。
- (2) 関係を続けることで新たな挑戦を可能にする。